

《修士論文要旨》

近世東アジアにおける葡萄・葡萄栗鼠文様の発生と展開

—琉球漆芸に見られる葡萄栗鼠文様の伝来経路をめぐって—

* 森 根 涼 子

葡萄栗鼠文様は近世初頭以降、漆器製作が盛んであった東アジアの広い地域に見られる工芸意匠である。中でも、沖縄には葡萄や栗鼠が存在しないにも関わらず、琉球王朝時代から数多くの葡萄栗鼠文様漆器が製作され続けてきた。琉球漆芸に見られる葡萄栗鼠文様の伝来経路の解明は、東アジアにおける漆工芸交流経路の解明にもつながると考えられる。

葡萄栗鼠という文様は、唐代に広まった葡萄唐草文様が土台にあり、いったんは影をひそめるものの近世以降再び葡萄が画題や意匠に用いられ、その点景として好まれた栗鼠が定型化していったものであろうと考えられる。現在、沖縄では漆芸のみに確認できる葡萄栗鼠文様であるが、日本・中国・朝鮮では漆芸のみでなく絵画や工芸全般の広い分野で見られる。本稿では、葡萄や葡萄栗鼠文様のあらゆる図様を比較検討し、琉球漆芸に葡萄栗鼠文様が使用されるに至った過程の考察を試みた。

そもそも葡萄が西域から中国にもたらされたのは漢代であり、北朝の異民族鮮卑の支配下で栽培が進み、仏像彫刻にも刻まれた。隋を経、唐代には葡萄や葡萄酒が西域の異国情緒漂うものとして認識され、

国内でも架をつらねて栽培される風景が見られた。また、葡萄栽培の普及と同時期、盛んに用いられた葡萄文様は、西域伝来の葡萄唐草文が主流であった。このような葡萄唐草文様は日本や朝鮮に広まり、白鳳時代の薬師寺薬師如来台座や出土した瓦類に確認できる。その後、朝鮮では高麗時代まで葡萄唐草文が使用されたが、日本では中世の葡萄文様は一切見当たらず、室町頃の水墨画の画題に確認できる程度である。葡萄栽培が日本で本格的に始まったのは、桃山から江戸初期頃だと思われ、この時期以降作例の数は急激に増加する。朝鮮の葡萄栽培に関する資料は確認できなかったが、作例から推測すると、日本と同時期か少し後れて栽培が始まったようである。つまり、本格的な葡萄栽培の始まりにより、葡萄・葡萄栗鼠文様は日本・朝鮮でも自国の文様として認識されていったようである。

ところで、近世の葡萄・葡萄栗鼠文様はその多くが絵画に起因しており、中国で初めて葡萄図の記録が見られるのは、北宋以後である。中でも、水墨葡萄で脚光をあげたのが元代の禅僧、日観であった。彼の葡萄図は日本にも将来され、禅僧寺院の少なくとも一部の画僧たちはこれに倣っていたようだ。後に、東アジアの中でも早い時期の葡萄

栗鼠図を、大徳寺真珠庵周辺で活動していた曾我宗文が描いている。江戸時代になると葡萄栽培の影響から、禅宗画僧のみでなく、円山応挙や伊藤若冲などの多くの画家が画題にしているが、日本における葡萄の点景は必ずしも栗鼠ではなかった。一方、朝鮮では、一七世紀前後やや後れて葡萄図が描かれるようになった。遅れの原因に考えられるのは、日本のように禅宗という葡萄図伝来の明確な経路がなかったためであろうと思われる。

画題であった葡萄は、工芸分野にも広がりを見せる。中国元代の磁器、染付には花鳥の一部として葡萄が描かれるが、明代には葡萄のみが焦点があてられる。また、葡萄栗鼠文様も明代前期に確認でき、その後も同形式の栗鼠の図様が見られる。中国においては現存する漆芸品の葡萄や葡萄栗鼠の作は稀であるので、文様の展開は磁器類が担っていたものと考えられる。朝鮮における葡萄・葡萄栗鼠文様も磁器が中心だが、漆芸でも割貝螺鈿の技法で独特な表現のものが確認できる。日本では、室町末から桃山にかけて沈金や鎌倉彫などの中国風な技法で葡萄・葡萄栗鼠文様が表現されているが、江戸前期には日本風の蒔絵技法が中心となり、栗鼠の尾を誇張した表現が顕著に見られる。漆芸以外にも磁器や欄間彫刻など、様々な分野で葡萄栗鼠文様が施された。

さて、琉球漆芸における葡萄栗鼠文様は、一六世紀初期の段階から、栗鼠の尾の誇張表現や葉の形状など日本の図様表現と似通うもの、同一パターンの図様を繰り返し用いるもの大きく二系統の作風に分か

れ、技法はどちらも琉球漆芸でよく用いられる箔絵と螺鈿が中心である。琉球における葡萄栗鼠文様の発生段階から、日本の図様が深く関与していたものと思われる。この裏付けとして、葡萄や栗鼠と関係の深い禅宗が一六世紀頃の琉球で繁栄していた記録⁷⁾が確認でき、大徳寺僧侶との親密な交流⁸⁾もうかがうことができる。このような状況を考慮すると、琉球の葡萄栗鼠文様が禅僧の交流によってもたらされた可能性は高い。しかし、琉球での葡萄栗鼠文様の使用と禅宗文化との関係はあまり取沙汰されておらず、葡萄の実りや栗鼠の多産から子孫繁栄を象徴する吉祥文として広く知られるばかりである。葡萄や栗鼠のいない琉球で漆芸文様として製作され続けてきたのは、葡萄栗鼠のもつ吉祥的な意味合いが好まれていたからであろう。

註

- (1) 司馬遷「史記 百納本二十四史(二)」列伝六十三 (台湾商務印書館 一九三七年)
- (2) 「齊民要術 十卷」巻四 (四部叢刊初編縮本二〇) 台湾商務印書館 一九七五年
- (3) 段成式「酉陽雜俎3」東洋文庫三九六(平凡社 一九八一年)
- (4) 「耶穌会士日本通信 上」(聚芳閣 一九二七年)
- (5) 「宣和画譜 二冊」叢書集成初編 中華書局出版 一九八五年
- (6) 島田修二郎「日親と墨葡萄」(美術研究 第三三七号) 東京国立文化財研究所美術部 一九八七年
- (7) 「琉球神道記」大岡山書店 一九三六年
- (8) 「中世日本の外交と禅宗」吉川弘文書 二〇〇二年